



Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）四
Author(s)	山本，一；佐藤，明浩
Citation	語文. 1987, 49, p. 41-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集(翻刻)四

山本 一・佐藤明浩

承元二年二月内宮三十首御歌^{全歌}

春

一五五八 春かせのなひくにつけて吉野山峯の小松そ色まさり行

一五五九 しつか庵の中かきかこふ梅かえのゆく手の袖に匂ふ春かせ

一五六〇 みよし野の霞つれなき山のはをわけてもいつる春のよの月

一五六一 帰雁いやとをさかる雲かくれなきてそこゆる明ほの山^{23オ}

一五六二 帰かりとこよの雲におもひいてよ吉野の花の明ほの空

一五六三 ひらの山みねの桜はちりぬらん花にこき行しかのうらふね

夏

一五六四 うたゝねの夢や昔にのこるらん花たちはなの明ほの空

一五六五 郭公よはのたひねの曙に山とふ声の雲に落くる

一五六六 うき世をやしのふの山の時鳥おもひかねつゝこゑきこゆらん

一五六七 時鳥雲ゐのよそに過ぬ也はれぬおもひの五月雨の比

一五六八 きえねたゝもゆるほたるに下の思ひさりとて人もかけし哀を

一五六九 まつしけきむかひの岡のゆふすゝみ秋よりさきにかせそなれ

行

秋^{23ウ}

き

一五七〇 夕露のをくか萩はらこゝろしてふきなかへしそ秋の初かせ

一五七一 わすれにしよのおもひの袖の露に色ふきそふる秋かせそう

一五七二 足引の山の道芝ふみわけてまた聞なれぬあらしをそ聞

一五七三 おほえすよいつれのあきの夕より露をく物と袖の成けん

一五七四 同^{統古} みよしの岩のかけちをならしても猶うきものは秋の夕くれ

一五七五 宿とはん方もいつくと白雲のたな引わたる山のかけはし

一五七六 しくれつゝみ山色つく山おろしに涙あらそひちる木のは哉

一五七七 山里は夜まさに長き窓の前ふかき木葉を吹あらし哉

一五七八 あやしくも夜のまのかせのさえくゝて今朝雪しろし庭の浅茅

一五七九 冬くれは身にしむかせに夢さめてひとりぬるよは床やさひし

き

一五八〇 かさゝきのはねに霜をきさむき夜の有明の月は影を残れる

一五八一 峯の雪みきは氷あともなしとはれぬ冬のうちの川風

雑

新古

一五八二 なかめはや神路の山に雲消て夕の空をいてん月かけ

一五八三 けふまては心のうちになくく世をいかてしる夜の月そあやし

き

一五八四 よそにてはうらむましともみえしよを袖しほれつゝなけきこ

し哉

一五八五 世中を誠にいとふ人やあるとこの夕くれの雲にとはくや

一五八六 大空にちきる思ひのとしも経ぬ月日もうけよ行末の空

一五八七 神路山あふく心のふかきをもいはておもへは色にみうら

ん」^{24ウ}

(一行分空白)

同外官三十首御会

春

一五八八 白妙の袖にそまかふ都人わかなつむ野の春のあは雪

一五八九 百千鳥なけとも雪はふるさとの吉野の山の明ほの空

一五九〇 にはの海やみきはの水こきわけて霞にまかふ春の舟人

一五九一 大空はそこともみえす霞つゝかたへはしらぬ晨明の月

一五九二 なかめやるとを山松の木のみより霞にみえて帰る雁かね

一五九三 吉野山たかねの雲ははれぬらん故郷さえぬ雪つもる比

夏」^{25オ}

一五九四 いにしへをこふる夕の軒はなる立花するるかせそかなしき

一五九五 山里はみねのあま雲と絶して夕涼しきまきのした露

一五九六 五月闇はれせぬみねの天雲になさはや袖のほすまなき比

一五九七 秋かくみたるゝ沢のほたるかもしなつますく露の草村

一五九八 六月や一むらすくる夕たちにしはしすゝしき森の下露

一五九九 霞はらひ夏野にそよく小男鹿のなかぬ計の夕暮の空

秋

一六〇〇 秋の露いかにをきける名残とて今朝色ふかし庭の村はき

一六〇一 朝露の岡のかや原山かせにみたれてものは秋そかなしき

一六〇二 かせ吹は玉とみえつゝ朝露に荻のうは葉そしつ心なき」^{25ウ}

一六〇三 末たはむ庭の小はきの朝しめり物おもふかりや鳴て過つる

一六〇四 たれこよひひなのなちをこきはなれやまとしまねの月をみ

るらん

一六〇五 袖にふく夕のかせのふかきいろをわすれてすきんみ山路の秋

冬

一六〇六 いこまやま雲のいにしへしらねともはれぬ時雨に思ひ侘つゝ

一六〇七 あしろもるうちの里人うしと世をしらすなからや袖ぬらすら

ん

一六〇八 山里のかりたの末のあさほらけしもうちはらひたつそ鳴なる

一六〇九 冬の夜のこはれる雪をふくかせに月さへさむく成まさる也」^{比イ}

一六一〇 かさしおる袖もや今朝は氷るらん三輪の松原の雪の曙

一六一一 花をまつ吉野の松の雪のいろにかねてそ春の面影はたつ」^{26オ}

雑

一六一二 かくれなくてらせはうれし神風やあふく心のふかきおくをも

一六一三 故郷になれし夕へをおもひ出て山吹をくるあきの松かせ

一六一四 波にしく袖に跡ふめはまちとり明なは月の影もとまらし

一六一五 なかむれはそこはかとなく袖ぬれぬむなしき空の四方の嵐に

一六一六 山里のよるのあらしに夢さめておもふ心を人はしらなん

一六七 神かせやとまみてくらになひくしてかけてあふくといふもか

しこし

(一行分空白)

承元々年十一月最勝四天王院御障子

春日野」26ウ

一六八 わかなつむ春日の原の雪まよりそれかとにはへ野^ふ辺の梅かえ

吉野山

一六九 ^{新古}みよしのゝたかねの桜ちりにけりあらしも白き春の明ほの

三輪山

一六〇 三輪の山杉のこかくれゆく月にすゝしく名のる郭公哉

竜田山

一六一 木の葉ちる秋も立田の山おろしよなきてもうらめさをし^{おし}かの
声

泊瀬山

一六二 はつせ山よのうきものはすみぬへし杉の窓ふく雪の下風

難波浦」27オ

一六三 難波江やあしの葉しろくあくるよの霞のおきにかりもなく也

住吉浜

一六四 住吉のうらくく船のたえゝに霞すとてもあととみえしを

芦屋里

一六五 ほたる飛あしやのうらにあまのたく一夜もはれぬ五月の空^(ママ)

布引滝

一六六 ^{続後撰}布曳のたきのしら糸うち^はへてたれ山かせにかけてはすらん

生田社

一六七 大方の秋の色たにかなしきにいくたのみに露そうつろふ

若浦」27ウ

一六八 わかのうらのあしま飛わけゆくたつの声聞かたに月そすみけ
る

吹上浜

一六九 かちをたえ夢路もたえぬ沖つかせ吹あけの浪の音のあらさに

交野

一七〇 やと^{よを}かさ^をん人もかたのゝさゝのはにみ山もさやにあられふる
也

水無瀬川山歟

一七一 水無瀬山木の葉あらはになるまゝに尾上の鐘の声そちかつく

須磨浦

一七二 すまのあまのしはたれ衣うちはへてきてはなとみぬ波の月影
明石浦」28オ

一七三 袖ぬらしく夜あかしのうらかせにおもふかたより月も出に
けり

飾麻市

一七四 はりまなるしかまの市にたつ民よ世にたつとても物やおもは
ぬ

松浦山

一七五 まつらかた浪にちかつく冬のよの月なへたてそ八重の塩かせ

因幡山

一七六 天の戸やあけはいなはの峯にしもまつ夜なふけそ秋のよの月

高砂

一七七 高砂や尾上の秋の長夜もあけぬひかりと鹿を鳴なる

野中清水」28ウ

一七八 いにしへの野中のしみつたつぬれはさゝわくる袖に露そこほ
る

海橋立

一六三九 久かたのあまの橋たて霞つゝ雲をわたるかりそ鳴なる

宇治川

一六四〇 橋姫のかたしき衣さむしろに待夜むなしき宇治の明はの

大井川

一六四一 大井河浪のかよひち立かへり跡あるかせに木のはちりつゝ

鳥羽

一六四二 雲の飛かりのつはさに月さえて鳥羽たの里に衣うつ也

伏見里

一六四三 をしねほす伏見のくろにゐるかりの遠さかりぬる明ほのゝ声

泉河

一六四四 泉川かは波しろくふくかせに夕涼しきかせ山のまつ

小塩山

一六四五 をしほ山こ松か原の明ほのに峯をへたてゝ立霞哉

会坂山

一六四六 あふ坂やせきの杉むらかすむめりゆくもかへるも春の道とて

志賀浦

一六四七 しかのあまの袖ふくあらしうらふけぬかへれやみきは氷もそ
する

鈴鹿山

一六四八 新古 すすか河ふかき木の葉に日数へて山田の原の時雨をそ聞

二見浦

一六四九 二見かた月をもみかけいせの海のきよき渚の春の名残に

大淀浦

一六五〇 おほよとのうらかせかすむ曙に雲をかりの音つれて行

鳴海浦

一六五一 よる波も哀なるみの恨さへかさねてそてにさゆる比かな

浜名橋

一六五二 頼とてねになきかへるこしの雁浜名の橋の秋霧の空

宇津山

一六五三 日くるればあふ人もなしうつ山のうつゝもつらし夢もみえぬ

に

佐良之那里

一六五四 続古 あちきなくなくさめかねつさらしなやかゝらぬ山も月はすむ

らん

清見関

一六五五 きよみかた月に出ぬる友ふねのこき行波もあくる程なき

富士山

一六五六 ふしの山おなし雪けの雲間よりすそ野を分て夕立そする

武蔵野

一六五七 むさしのやくれはいづくにやとからん霞もみちも末をしらね

は

白川関

一六五八 雪にしく袖に夢路もたえぬへしまた白河の関のあらしに

阿武隈川

一六五九 かせはやきあふくま川のさ夜千鳥涙なそへそ袖の氷に

安達原

一六六〇 人とはぬあたちのまゆみたかひけはすゑさへよるの錦成らん

宮城野

一六六一 宮木のやあかつきさむく吹かせに鳴音によはき蜚かな

安積沼

一六六二 さゝわけしあさかのぬまの花かつみかつみる夢のあくる程な

き

塩竈浦」31オ

一六六三 しほかまや春のもしほのうき枕おほる月夜に浦かせそふく

(一 行分空白)

建暦二年十二月廿首御会 五人百首

春

一六六四 みよしの宮のうくひす春かけてなけとも雪は故郷の空

一六六五 いにしへの人さへつらし婦かりなと明ほのとちきりをきけん

一六六六 あさみとりのはらの霞ほのくくと遠万人のそてそきえゆく

一六六七 あふみなるしかの花そのさと荒て驚ひとり春そ忘ぬ

一六六八 なれくくて雲の花をみし春の木のまもりこし月そ忘ぬ

秋」31ウ

一六六九 旅人の袖うちほらふあきかせにしほれてしかの声そきこゆる

一六七〇 こそよりも秋のね覚そなれにけるつもれる年の験なるらん

一六七一 なみたかもあやしく秋の曇かなうらむるからの月やみるらん

一六七二 中くにおもひいてこそ袖はぬるくなれし雲の秋のよの月

一六七三 年ふれは秋こそいたくなしけれ露にかはれる色はみね共

一六七四 白妙の袖にいくよかなれぬらん過にしかたの秋のよの月

一六七五 浜かせにいまや衣をうつらなく真野の入江の秋の夕くれ

一六七六 長月や影ほのかなる有明に衣うつ也をかへのさと

一六七七 しくれ行庭の木の葉の色よりもふかきは秋の思也けり

一六七八 窓ふかき秋の木のはを吹たてゝ又時雨ゆく山おろしのかせ」

述懐

32オ

一六七九 人心うらみわひぬる袖のうへを哀とやおもふ山のはの月

一六八〇 いかにせん三十あまりの初霜をうちはらふ程に成にける哉

一六八一 人もおし人もうらめしあちきなく世をおもふ故に物思ふ身は

一六八二 うき世いとふおもひはとしそつもありぬるふしのけふりの夕暮

の空

一六八三 かくしつゝそむかん世までわするなよあまてるかけの有明の

月

(一 行分空白)

正治貳年七月北面御歌合

松梨多年

一六八四 長世の友とやちきる春日野のまた二葉なるまつの緑を」32ウ

水辺月

一六八五 いはし水すむ月影の光にそむかしのそてをみる心地する

初見紅葉

一六八六 見わたせはけふ白露のうはそめに色つきにける衣手のもり

(二 行分空白)

同七月十八日御歌合

関路月

一六八七 きよみかた関もる波に夢さめて都にすみし月をみる哉

古郷虫

一六八八 あれにけるたかつの宮をきてみればまかきの虫やあるしなる

らん」33オ

門田稻花

一六八九 山さとのかたのいなはかせこえて一色ならぬ浪そたちける

(二 行分空白)

同八月一日新宮歌合

社頭祝

一六九〇 神まつるゆふしてかくる櫛葉のさかへやまさん宮の玉かき

池上月

一六九一 ひろ沢の池にやとれる月影や昔をうつす鏡なるらん

野辺虫

一六九二 宮木のこはきか枝に露ふれて虫のねむすふ秋の夕風」 33ウ

(一行分空白)

同九月御歌合

神祇

一六九三 日影にも昔わすれす神かせや御裳濯川のさゝ浪の声

若草

一六九四 春さてもつもりし雪は消やられてむらくあをしのへの若草

落花

一六九五 御芳野の春の嵐やわたるらん道もさりあへす花の白雪

菖蒲

一六九六 ゆふ風は花橘にかほりきて軒はの菖蒲露さたまらず」 34オ

時鳥

一六九七 郭公いつちいく田のもりならん声の名残を雲に残して

浦月

一六九八 秋の月浪路もとをくかけさえて心さへにもすまの浦風

山嵐

一六九九 うすもみちなを色まさされ三室山あらしにつたふ秋の時雨に

暁雪

一七〇〇 なかむれはくもりもやらず風さえて雪まの空に在明の月

水鳥

一七〇一 池さゆるみきはのつらくさ夜更てうきねのをしも遠さかるら
ん」 34ウ

庭松

一七〇二年は今あけぬとみれは我宿の緑の松に春かせそふく

(一行分空白)

同九月尽日御歌合当座

月契多秋

一七〇三 千とせまておもかはりすな秋の月老せぬ門に影をとめて

暮見紅葉

一七〇四 暮にけり秋の日数もあらしやま紅葉を分て入逢のかね

曉更聞鹿

一七〇五 しのとめや吹さたまらぬ秋かけに尾上のしかの声まよふ也」

(一行分空白)

同十月一日歌合当座

初冬嵐

一七〇六 山河や岩まの水のいはねともあらしにしろし冬のはつそら

暮漁舟

一七〇七 あはれなりふたみの浦のくれかたにはるかに遠き蟹の釣舟

枯野朝

一七〇八 おもふよりうらかにけりなら柴やかりはのをのゝ明ほのゝ

それ

一七〇九 おもふよりうらかにけりなら柴やかりはのをのゝ明ほのゝ

(一行分空白)

同日歌合当座」 35ウ

社頭霜

一七〇九 雅経勝 千早振かた岡山は霜さえて玉かきしろくゆふかけてけり

東路月

一七一〇 定家持 すきゝてもしはしやすらへ秋の空清見か関の月をなかめて

(一 行分空白)

同十一月十一日新宮歌合当座

社頭夕風

一七一一 具親持 ちはやぶるあけの玉かき神さひて櫛葉ことになひく夕風

海辺霞

一七一二 前座主勝 心なき人もあらしや難波かた霞に曇るはるの浪路に」 36オ

古寺郭公

一七二三 家隆貞 名にしおはゝしはしやすらへ時鳥立はなてらのなつの夕くれ

杜間月

一七二四 寂蓮持 秋かせはうはゝにさむしかしはきのもりのわたりに有明の月

山時雨

一七二五 定家新統 立田山木すゑのもみち秋くれてつれなき松になを時雨也

(一 行分空白)

同十月七日新宮歌合当座

紅葉残梢

一七二六 つれなくもあらしに残るこすゑ哉下葉の色のゆくゑなきまて」 36ウ

寒夜埋火

一七二七 音さゆるよはのあらしも埋火のあたりは冬もなき心地して

海浜重夜

一七二八 霜さゆる月をなかめてかやむしろしきつのうらに^{浪イ}あまた旅ね

ぬ

(一 行分空白)

同十一月八日影供歌合

暮山雪

一七二九 冬籠り春にしられぬはななれや吉野の奥の雪の夕暮

古寺月

一七三〇 はつせ山あらしにかねの音さえて月よりしらむ有明の空」 37オ

朝遠望

一七三一 こまなめてうちいてのはまをみわたせは朝日にさほくしかのうらなみ

新後拾

(一 行分空白)

同十一月廿九日御幸住吉社三首^{御熊野詣之次}

社頭祝

一七三二 はるくゝとおもふもとをし住吉やかねての松の千代の行末

海辺雪

一七三三 磯とをく浪ふきたつる塩かせは雪にそつらき住吉の浦

新後 羈中月

一七三四 かねの音も聞えぬたひの山路には明行そらを月にしる哉」 37ウ

(一 行分空白)

同十二月歌合

曉尋千鳥

一七三五 さ夜千とりゆくゑをとへはすまの浦関もりさます曉のこゑ

山家如春

一七三六 花やいそく日数やとしを惜むらん梢春たつふゆの山さと

海辺歳暮

一七二七 冬の磯に春は来にけり年なみをたつとやいはんかへるとやいはん

(一行分空白)

正治三
建仁元年正月十八日影供御歌合 38 オ

遠島朝露

一七二八 春霞たてるやいつこ朝日かけさし行ふねをまつかうら島

隣家夜梅

一七二九 梅かゝのかすめる月に匂ふかなよそのかきねに春風そふく

山家残雪

一七三〇 まれにたに人もとひこぬ松の庵の軒はに残る春の淡雪

(一行分空白)

同三月十八日影供御歌合

梅香留袖

一七三一 梅かゝをなかくめし袖にとめをきてむなしき枝に風を残れる

38 ヲ

翠柳誰家

一七三二 ぬししらぬそもの柳これそのなひくにつけて春過るもの

水辺躑躅

一七三三 山川の苔のいはねの岩つゝし春にもあへぬはなの色哉

古郷山吹

一七三四 故郷の春やむかしの春の月われもとの身とさける山吹

雨中藤花

一七三五 たそかれのたつゝしさに藤のはなおりまよふ袖に春雨の空

山家暮春

一七三六 くれぬともかすみはのこれ柴の戸のしはしも春の忘^度て 39 オ

(一行分空白)

同三月尽新宮撰歌合

霞満遠樹

一七三七 うらの松色やまさると春みれは霞そたてるしかのから崎

竊中見花

一七三八 かせ吹は花は波とそこえまかふわけこしたひも末の松山

雨後郭公

(一行分空白)

松下納涼

(一行分空白) 39 ヲ

山家秋月

一七三九 柴の戸やさしもさひしき山への月吹風にさをしかのこゑ

湖上曉霧

一七四〇 志賀のうらやにほてる沖は霧籠て秋もおほろの有明の月

風吹寒草

一七四一 草のはら露のやとりを吹からにあらしにかはる道芝の霜

雪似白雲

一七四二 雪やこれはらふ高まの山かせにつれなき雲の峯に残れる

寄神祇祝

一七四三 神かきや八重の櫛葉かさねてもみもすそ河の末そはるけき

遇不逢恋

(一行分空白)

同四月廿六日御会鳥羽殿初度

池上松風

一七四四 松かせに打出る波の音はしてこほらぬ池の月を残れる

(一 行分空白)

同四月晦日影供歌合

曉山郭公

一七四五 時鳥こゑはつかの山のはの有明の月にしはしやすらへ

海辺夏月」^{40ウ}

一七四六 明石かたねぬにあげぬと詠れは浦よりつたふ空の月影

忍恋

一七四七 一すちに色にそ出しとおもふには忍ふ心にかつものそなき

(一 行分空白)

同日当座御会

竹風夜涼

一七四八 夏も猶かはらぬ月をしるへにて秋かせかよふ庭のくれ竹

山家五月雨

一七四九 はれゆかん程をも今は松のかとさしもつれなき五月雨の雲

(一 行分空白)」^{41オ}

同五月日城南寺歌合

杜頭祝言

一七五〇 つたへくる秋の山辺のしめの内にいのるかひあるあめの下哉

雨中時鳥

一七五一 雲のほるをのか五月のむら雨に声をあらそふ郭公哉

野亭水涼

一七五二 せくし水ふかき夏のゝ草の庵にもりきて月の影そとめける

(一 行分空白)

同七月廿七日当座御会和歌所

暮山遠雁」^{41ウ}

一七五三 はつかりのとこよの秋をすみすてゝ山路はるかに夕くれの声

(一 行分空白)

同八月三日影供御歌合和歌所初度

初秋曉露

一七五四 昨日までかゝる露やは袖野ヘイにをく秋来にけりなあかつきの風

閑路秋風

一七五五 夏たにも月は秋なるきよみかた浪ふく風のこのころの空

旅月聞鹿

一七五六 夜をかきね月に朝たつたひころもきつゝなれゆくさをしかの

こゑ

古郷虫」^{42オ}

此上句五百首御歌内如何

一七五七 とふ鳥のあすかの宮の蜚月やむかしの秋に鳴なり

初恋

一七五八 ならはすよ秋なれはとてをくか露かたしく袖のうちしめるま

て

久恋

一七五九 今こんといひしはかりを頼にていく長月をすくし来ぬらん

(一 行分空白)

同月十五夜撰歌合

月多秋友

一七六〇 ゆく末の干とせのあきはいく廻りなれても夜はの月を詠ん

月前松風」^{42ウ}

一七六一 庭の松の木の間もりくる月影に心つくしの秋かせそ吹

月前掃衣

一七六二 あさちふの月吹かせに秋たけて故郷人はころもうつ也

海辺秋月

(一行分空白)

湖上月

一七六三 から崎やにほの水うみの水の面にてる月浪を秋風そ吹

深山曉

一七六四 すみなれてたれ我やとゝなかむらん吉野ゝ奥に有明の月
新統

野月露冷」43オ

一七六五 月すめは露を霜かと宮城のゝ小萩か原はなを秋の風

田家見月

一七六六 やとちかき山田の庵のいなむろし誰しきなれて月をみるらん
新統

河水似氷

(二行分空白)

同夜当座御会 和歌九品

月前雁

一七六七 かりのくる峯の秋きり空はれて羽しろたへにすめる月影

月前旅」43ウ

一七六八 旅の空秋のなかはをかそふれはこたへかほにも月そさやけき

月前窓

一七六九 たえすとふ月いくたひか詠してこぬ夜数多となけき侘らん

(一行分空白)

同十二月二日影供歌合 匿名

寒夜冬月

一七七〇 ふかき夜の霜をちさに詠れは月に残れるむさしのゝ秋
通具勝

山家暮風

一七七一 庭の松にあらし吹こぬ夕たに深山のおくはさそなわひしき
慈円勝

初窓」44オ

一七七二 大方の露なきころのそてのうへにあやしく月のぬるゝかほな
左大臣勝

る

同十二月廿八日石清水社歌合

社頭松

一七七三 八幡山あとなれそめし注連の内になを万代と松かせそ吹
新統古忠良勝

月前雪

一七七四 山かせの木のまの雪を吹からに心つくしのふゆのよの月
忠良勝

旅宿風

一七七五 草枕むすはぬ夢は夜比へてたゝ山かせの松にふく声
忠良勝

(一行分空白)

同二年正月十三日御会 和歌所」44ウ

初春松

一七七六 萬代のはしめの春としらせけり今朝初風の松にふく声

春山月

一七七七 霞たち木のもめ春の山のはを光のとかにいつる夜の月

野辺霞

一七七八 梅かゝは霞の袖につゝめともかやはかくるゝ野へのゆふかせ

(一行分空白)

同二月十日影供御歌合

海辺霞

一七七九 うす煙もとよりかすむ塩竈のうらなれにける春の空かな」45オ
通具勝

関路雪

一七八〇 鶯のなけともいまた降雪に杉の葉白き逢坂の山
新古忠良勝

忍恋

一七八一 波にぬるゝいせをのあまのすてころも忍ぬたにもしほれわふ也

(一行分空白)

同三月廿二日三体和歌高体 春 瘦体 秋

艶体 恋 旅

春

一七八二 雁かへるとこよの花もいかなれや月はいつくもおなし春の夜

夏 45ウ

一七八三 なつの夜の夢路すゝしき秋の風さむる枕にかほる立花

秋

一七八四 しほれこし袂ほすまも長月の有明の月に秋風そふく

冬

一七八五 おもひつゝあけ行夜はの冬の月やとるかせはき袖の氷に

恋

一七八六 ^新いかにせん猶こりすまのうら風にくゆる煙のむすほゝれつゝ_{行イ}

旅

一七八七 たひ衣きつゝなれ行月やあらぬ春は都とかすむ夜の空

(一行分空白) 46オ

同三月同日当座御会

暮春

一七八八 ことしさへしかのやよひの花盛とはれてくれぬ春の古郷

(一行分空白)

同五月影供御歌合

曉聞時鳥

一七八九 今こんとたのめやをきし時鳥月そ待出るあり明の声

松風暮涼

一七九〇 夏山のしかに告こせまつのかせおのへに今は秋のゆふくれ

遇不逢恋 46ウ

一七九一 わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出_{にイ}けり

(一行分空白)

同六月水無瀬釣殿御歌合

河上夏月

一七九二 筏士のうきね秋なる夏の月清瀧川にかせなかるなり

海辺見螢

一七九三 つの国のあしやのさとにとふ螢たかすむかたのあまのいさり

火

山家松風

一七九四 柴の戸をあさあけの夏の衣手に秋をともしなふ松の一声

初恋 47オ

一七九五 大方の夕へはさそのなかめより色つきそむる袖の一しほ

忍恋

一七九六 なけきあまりものやおもふとわかとへはまつしる袖のぬれて

こたふる

久恋

一七九七 ^新おもひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕暮の空

(一行分空白)

同八月十五日夜

月前虫

一七九八 故郷のよもきか月にむすふ露さひしとかこつきりゝす哉

月前鹿」47ウ

一七九九 つつとも月に袂はぬれこしをわきてこよひの小男鹿の声

月前風

一八〇〇 なかはたけは今夜の月を吹かへせさそなむかしの秋の山風

(二行分空白)

同八月廿日影供歌合

江月聞雁

一八〇一 秋をへて月すすみの江の松かせに雁かねさむし霜になる空

夜風似雨

一八〇二 松かせはみやまの月に廻なりね覺の秋の袖に時雨て

依忍滴窓」^{増イ}48オ

一八〇三 せきかへす涙の川にうきねしてみる夜の夢のさたかにもあらぬ

(二行分空白)

同九月廿九日窓十五首撰歌合

春窓

一八〇四 月残るやよひの山のかすむ夜をよしとつけよまたすしもあらす

夏窓

新統

一八〇五 さてもいかにいはかきぬまの菖蒲草あやめとしらぬ袖の玉水

秋窓

一八〇六 よしやさはたのめぬやとの庭におふるまつとなつけそ秋の夕

かせ

冬窓」48ウ

一八〇七 うつり行まかきの菊もおりくはなれこし比の秋をこふらし

曉窓

一八〇八 白露のおきて侘しき別をもあふにそかこつ有明の月

暮窓

一八〇九 ^{新統古}いかにせんこぬ夜あまたの袖の露に月をのみ待タくれの空

罽中窓

一八一〇 君もし詠やすらந்தひ衣あきたつ月を空にまかへて

山家窓

一八一 身をしれは思ひもよらて杉の庵に猶ざりともと松風ぞ吹

旅泊窓」49オ

一八二 おもふ人をうきねの夢にみなと川さむる袂にのこる面かけ

関路窓

一八三 窓をのみすまの関やのいたひさしとして袖共波はわかしを

古郷窓

新古

海辺窓

一八四 里はあれぬ尾上の宮のをのつからまろこしよひの昔也けり

河辺窓

一八五 いかにせん思ひありその忘貝かひもなきさに波よするそて

し

寄雨窓」49ウ

一八七 おもふ事そなたの雲となけれ共いこまの山の雨の夕くれ

寄風窓

一八八 わくらはにとひこし比におもなれてさそあらしの庭の松風

(二行分空白)

同九月十三夜御会当座

月前秋風

一八一九 夜半の月いつると山の峯におふる松をもはらへ秋ふかき風

水路秋月

一八二〇 にはの海やひとりそ出る秋のよの月を友とはしかの舟人

曉月鹿声」50才

一八二一 さをしかのなくねにあらぬ露ををく空行月は峯近き程

(一行分空白)

同夜当座御会

折句 十三夜

一八二二 ^{新統}しかの浪や浦はの月のさゆるよに昔こふらし山の秋風

隔題 水無瀬川

一八二三 浪をみなせかはそ月のしはしむ清瀧川のはやき流は

(一行分空白)

同三年正月十五日御会高陽院殿

松有春色」50才

一八二四 庭の松をのかみとりもたよりあれば今はいく世の春をむかへ

ん

(一行分空白)

同六月十六日影供御歌合

草野秋近

一八二五 のへの庵の軒はの萩にむすひをく露をかことに夏更にけり

水路夏月

一八二六 筏士よく夜か袖に見なれ棹清瀧川の夏のよの月

雨後聞蟬

一八二七 せみの羽にもとをく露に雨過てぬるゝかほなる夕暮の声

(一行分空白)」51才

同六月十六日影供の次夏月二首

一八二八 秋の月かけをや夏にかさゝきの雲のかけはし程はなけれど

一八二九 ほともなく出ていなはの峯におふるまつとしつれば有明の月

(一行分空白)

同七月五日八幡宮撰歌合

初秋風

一八三〇 わきも子か袖吹かへす秋かせのまたうらなれぬ涙とふらん

野径月

一八三一 さひしさは秋のさかのゝへの露月に跡とふ千代の古道

故郷霧 海辺雁 歸中春 ^{己上三首御製}」51才

山家松

一八三二 都人とはぬ程を思ひしれみしよりのちの庭の松風

(一行分空白)

同八月十五夜 和歌所当座五首

月アキノツ。此五字涉五首置初一字

一八三三 あふみのやなからの山の秋風に雲こそなければらさきの月

一八三四 北へさりし雁も今夜の月ゆへや秋は都と契をきけん

一八三五 のとかならんまてとや人のちきりけんあれたる庭の秋のよの

月

一八三六 津の国の難波わたりは月の秋忘ねいまは春の明はの

一八三七 きてとはん人のあはれと思ふまてすめかし秋の山里の月」52才

(一行分空白)

同十一月釋阿九十賀御会

一八三八 もゝとせにちかつくつえのよゝの跡にこえてもみゆる老の比

哉

(二行分空白)

同時屏風御歌

霞

一八三九 霞しく春の夕くれなむれは山さしのほる臘なる月

若草

一八四〇 下もゆるかすかの野への草のうへにつれなしとても雪の村消

花」52才

一八四一 移さくとを山鳥のしたり尾のなか／＼し日もあかぬ色哉

新古
郭公

一八四二 ほかにもいまや聞らん時鳥いや遠さかる末のさと人

五月雨

一八四三 水まさるみつのわたりのさみたれにつなてほとふるのほり舟

哉

納涼

一八四四 清水せくかた山さしのこ松かけこゝをしめてや庵むすはん

秋野

一八四五 旅ねするのほら秋かせ身にしめて面影さらぬ故郷の月

月」53才

一八四六 秋のしもしろきをみればかさゝきのわたせる橋に月のさえけ

る

紅葉

一八四七 山のせみなきて秋こそふけにけり木々の梢の色まさりゆく

千鳥

一八四八 たひねするあまのとまやのとまをあらみ寒嵐に千鳥さへなく

雪

一八四九 山ふかきしのやの雪のあきければ都はなをやみそれふるらん

水(行間天ノ余白ニ注記「二行ニ立ヘシ」)

一八五〇 大井川水をしのくいかたしのあとよりこそは舟のかよひち

(二行分空白)
同月日六首和歌所」53才

故郷春曙

一八五一 三吉野や花はかはらす雪とのみ古郷匂ふあけほのゝ空

羈中夏蜚

一八五二 玉もしき一夜ふしみんあしのやのなたのしほちにほたる飛也

野徑秋風

一八五三 いにしへの千代の古道としへても猶あとありやさかの山かせ

山家冬雪

一八五四 いつまてか跡をも雪におしみこし春にまかする柴の庵哉

海辺月明

一八五五 清みかたふしの煙やきえぬらん月影みかくみほのうら浪」54才

寄暮雑歌

一八五六 なかめのみしつのをたまきくりかへし昔を今の夕くれの山

(二行分空白)

元久元年七月十六日御会宇治御幸

一八五七 うちの山雲ふきはらふ秋かせにみやこのたつみ月もすみけり

水月。

一八五八 むかしよりたえぬなかれにすむ月をみかきてわたるうちの川

かせ

野露

一八五九 宮城のゝ草葉に露やおもるらん木の下はらふ秋の初かせ

「夜窓」 54ウ

一八六〇 足引の山風吹て寒き夜のなかきをひとり恋つゝそふる

秋旅

一八六一 都いてしまた夏衣うすき程としはし吹そふふしの秋風

(一行分空白)

同八月十五夜御会五辻殿初度

松間月

一八六二 月のすむひらのゝ松に吹かせのちかきを宿のかひにする哉

野辺月

一八六三 むさしのや明行月の山のはゝわけこしかたの狹のうは風

田家月」 55オ

一八六四 しかそ鳴小田のかりいほのとまをあらみ名はかり月はもりあ

かせ共

羈旅月

一八六五 都おもふ涙に月をやとしをきてあさたつのへのすゑの秋かせ

名所月

一八六六 月は今夜うらはあかしとしらすともしるくもあるへき浪の上

哉

(一行分空白)

同夜当座御会

甌月

一八六七 あすよりは秋の半も杉の門しはしなあけそ三輪の月かけ

(一行分空白)」 55ウ

同十月石清水御歌合当座

初冬

一八六八 秋の露わすれぬ袖も有物をいつしかかはる野への霜哉

時雨

一八六九 まきのやにいとほしくれもるとてももれはそやとる床の月

影

寒野

一八七〇 一とせも今はすゑのゝむら薄霜ふく夜半の風のさむけさ

(一行分空白)

北野社歌合之由被注尤不審

同十月日当座歌合」 56オ

時雨

一八七一 月そとはもるやま道の夕しくれのこる下葉もあらし吹也

忍窓

新古

一八七二 わかこひはまきの下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

羈旅

一八七三 さひしさをいつよりなれてなかむらんまたみぬ山の秋のゆふ

暮

(一行分空白)

同十一月十三日春日社御歌合

撰政勝

落葉

一八七四 木の葉ちる山のすそのゝ夕くれを詠てけりな袖はぬれつゝ」

新拾持

一八七五 足引の山の木からし吹からにくもるときなき有明の月

松風

一八七六 あはれまむ数には入よ春日山それをそ今は松にふくかせ

(一行分空白)

同二年三月廿六日

新古今竟宴和歌

一八七七 磯のかみふる世をいまにへこし昔のあとを又たつねぬる統古

同七月十八日北野御歌合祈雨当日出題
攝政判有序

一八七八 初秋曉前大僧正持 57ウ

一八七八 秋になるあかつきのかねうちつけになるゝか袖の露も涙も

暮山雨

一八七九 足曳の山辺もよそに曇来ぬ秋のめくみのゆふくれの雨

田家風

一八八〇 空にこふかとの雨の日数経て雲吹かへすあきの夕かせ

(一行分空白)

建永元年正月十一日御会高陽院

庭花春久

一八八一 春とめる庭のあるしは八雲たついつもつきせぬ花のかそする

(一行分空白) 57ウ

同七月廿五日御歌合卿相侍臣歌合

朝草花

一八八二 横雲のたな引山の岡辺なるすゝきもしろく吹あらし哉

新持 海辺月

一八八三 もろこしの山人いまはおしむらんまつらかおきの明かたの月

藤 廊中暮

一八八四 をくるへき月たに山をまたてぬに夕のあらし袖にしほれぬ

(一行分空白)

同日当座御歌合 建永元年七月イ

曉聞雁 58ウ

一八八五 はつかりの山とひこゆるありあけに風吹すさむ荻のうへ哉

田家鹿

一八八六 夜もすからいほもるこゑのと絶せて外山にかへる鹿ぞ鳴なる

深山窓

一八八七 跡たえてふかき涙の色までもとはれぬ山の秋そかなしき

(一行分空白)

同月中後日当座御歌合

湖辺月

一八八八 にほの海のもとよりぬるゝたもとはかはりてやとれ秋のよの月

暮山雲 58ウ

一八八九 しら雲のたな引山のゆふかせに身をやすてゝん鹿ぞ鳴なる

行路風

一八九〇 忍こし道のへ柳秋もなをあはれむかしのかせはらふらん

同月中当座御歌合

寄風懷旧

一八九一 わすれぬる今はみとせの冬のあらし時雨し露の袖にまたひぬ

雨中無常

一八九二 なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

被忘恋

一八九三 袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつれはかはるなげきせしまに 59ウ

(一行分空白)

同八月五日鳥羽院新御所初度当座

庭上月当座

一八九四 庭の松にふかき嵐やかへるらん光をみかくやとの月影

(一行分空白)

同八月御歌合式御会

述懐三首

一八九五 なにと又ふかきおもひのかさぬらんくたるよをのみなけくへき身に

一八九六 なさけありし昔を今になし侘て袖のしつくのしつのをたまき
一八九七 うらと見しそれより袖はしほれにきさても月日は過しけるよを」59ウ

(一行分空白)

建永一
承元々年正月廿二日御会和歌所

春松梨齡^{宸筆}御清書 神路山有闕字

一八九八 新説 我たのむ 神路の山の松の風いくよの春の色はかはらし

(一行分空白)

同三月七日下午鴨社歌合

山家朝霞

一八九九 櫛の戸や難面あけし名残とてこれよりつらき朝霞哉

湖辺夕花

一九〇〇 けふくれぬあすは麓の雪とみん長良の山は嵐吹也」60オ

社頭述懐

一九〇一 玉 みつかきやわか代のはしめ契をきしその言の葉を神やうけん

(一行分空白)

承元ニイ
同日賀茂之社歌合

海辺帰雁

一九〇二 難波かたすきこし春に又やあふはかなく帰る雁そ鳴なる

暮山春雨

一九〇三 御芳野や春雨きはひちるはなをけふもくれぬとさそふ山かせ

社頭夜風

一九〇四 和歌浦やたむくる夜半のかせにみん猶此道に神はなひくや」60ウ

(一行分空白)

同二年三月住吉御歌合

寄月祝

一九〇五 行末はなをもつものうら風にくらぬ月の影の長閑さ

寄旅恋

一九〇六 足曳の山わけころもかはく程わすれぬ袖の夜はの面影

寄山雜

一九〇七 新説 おく山のおとろか下もふみわけて道ある世そ人に知せん

(一行分空白)

同閏四月四日」61オ

雨中子規

一九〇八 しつかなる夕の雨の草の庵ことゝへ山の鳥のひとつゑ

遇不逢窓

一九〇九 あひみても中／＼つらきさやの山さやはちきりし峯の月影

寄述懐雜

一九一〇 青柳の林の下よたつね入ぬ千年の跡のそのゝ古道

(一行分空白)

同四年八月十一日

雨中草花

一九二 雨ふれはいと、池水ますかゝみかけさへうつる 秋はきの
な」61ウ

(一行分空白)

同九月粟田宮御歌合

寄海朝

一九二とまりする一夜のちきりこきわかれをのかさまく出る舟人
玉

寄山暮

一九三 水無瀬山入逢のかねに年を経て三十あまりの冬そちかつく

寄月窓

一九四 中く、にみし世ににたる月もうし同じ袖には廻来ぬれと

建曆二年二月廿五日

於紫宸殿花下三首」62オ

一九五 吹かせもおさまれるよのうれしきは花ちる時そ先おほえける
統古

一九六 我ならてみしよの春の人そなきわきても匂へ雲の上の花
同

一九七 九重の花も老木に成にけりなれこし春も昨日と思ふに
統後

(一行分空白)

同三年七月十七日松尾社歌合無判

初秋風

一九八 有
みとりなる一葉もまづは落ぬらん柞のもりの秋の初風

山家暮

一九九 山里の夕影草の下露を袖にかけつとふ人そなき

社頭雜」62ウ

一九〇 夕時雨いかにそむとて尋こし色かはるなよ松の尾のみや

(一行分空白)